



七夕の風にひるがえる
カーテン



山城 窓

西面真人の楽しみ（13時）

「どうもカーテンになったらしいんだ」

「カーテン？」

「そう、カーテン」

そうって牧田は少しうつむく。その口は俺に何かを届けようと必死だが、その目は自信なさげで俺から逸れていく…そんな感じだ。

「唐崎っているだろ？」牧田が改めて告げる。「唐崎武雄。同じクラスにさ」

「いるね」

「その唐崎がさ、なったみたいなんだ。カーテンに」

「唐崎がカーテンになった？」

「そう」とって牧田はやはり目を伏せる。

その仕種に苛立ちながら、俺はいう。

「それを言うために、君はわざわざ俺の家にまで来たのか？ 日曜日の昼間に？」

「ふざけているわけじゃないんだ」彼は弁解するように続ける。「もちろんまだちゃんと確かめたわけじゃないけど…でも確かめようがないし…」

彼は目を泳がせながら語る。事情はさっぱりわからないが彼は困っているようだ。俺は自分の部屋のカーテンに目を向ける。そのカーテンを指差して、俺は牧田に確認する。

「カーテンっていうのはあれだよな。その窓のところに吊り下がっている布のことだよな？」

「そう…。そのカーテンだよ。あ、でもこの部屋のカーテンじゃないんだ」

「じゃ、どこの部屋のカーテンになったんだ？」と仕方なく俺は尋ねる。

「三島江ゆかりは知ってるかな？」

「三島江ゆかり？」

「三組の…中学は東中だった。割と人気のある…」

「聞いたことはあるな。見たこともあるかもしれないけど…顔と名前は一致してない」

「見た目は色白でちょっと品のある感じの…」

「いいよ、説明は。それで、その三島江ゆかりがどうしたんだ？」

「その三島江ゆかりの部屋のカーテンになったらしいんだ」

「唐崎武雄が？」

「そう」

「三島江ゆかりの部屋のカーテンになった？」

「そう」

このところ蒸し暑い日が続いているが…正気を失うほどではあるまい。そんなことを思いながら、俺は椅子を軽く回して、突っ立っている牧田を促す。

「とりあえず、そこらへんに適当に座ってくれ」

「ああ、うん」と牧田は座り場所を探すようにキョロキョロと視線を散らしてから、ストンと落下するようにその場に座り込んだ。それを見届けてから、俺は尋ねた。

「今のところ君の話がどういう種類の話なのかもよくわからない。君の話し方でいいから、少し整理して話してくれ」

「ああ、うん」と臆病そうに彼は相槌を打つ。小柄な男というのは、こんな感じになるものなのかな、と思いながら、俺は勉強机に肩肘をつき彼の話のを待つ。

「この間さ…もう三週間ぐらい前かな」と牧田は切り出す。「僕は唐崎の家に行ったんだ。アルバムを持って」

「アルバムって？」

「中学のときのアルバムを見せてくれってあいつが言うからさ。つまり僕は三島江ゆかりと同じ中学だったから」

「つまり唐崎は三島江ゆかりのことが好きだってことかな？」

「そうだよ、そう！」

「それを先に言うべきだったね。話がわかりにくい」

「それで、まあ唐崎の家でさ、三島江の話をいろいろとしてたんだよ。一年のとき、唐崎も三島江も別々のクラスで整美委員だったらしくて。で、その委員会でプリントを回すときに一回だけ言葉を交わしたそうなんだけど、唐崎はそのときの三島江の微笑みにヤラれたらしいんだ。何でも他の女子にはない清純さが感じられたそうだ」

「そのくだりを俺は聞かないといけないのか？」

「あの…まあ、それでさ、そんな話をしているときに…唐崎の肩にテントウ虫が止まったんだ。で、これは後から聞いたんだけどさ、『体にテントウ虫が止まると願いが叶う』っていわれてるらしいね？」

「聞いたことはあるけど…どっかの国の迷信だろ？」

「しかもその日の朝には彼は片目の白猫を見たらしいんだ。これは知ってるかな？ 朝片目の白猫を見ると願いが叶うともいわれているんだ」

「知っているけど、それがなんだってんだよ？」

「しかも彼はその日『パンダのランデブー』っていうチョコスナックのお菓子を食べていて幻とも言われている『刀を携えたパンダ』が出てきたらしいんだ。それを食べると願いが叶うっていわれて…」

「だからそれがどうしたってんだ？」と俺は思わず彼の言葉を遮る。

「それで…」牧田はおもむろに言い直す。「その日から唐崎の姿が消えたんだ」

「消えた？」

「そう。学校にも来てないだろ？ それで唐崎の母さんに相談されてたんだ。僕は唐崎の家にも何度か行ってたから唐崎と仲が良いと思われててさ。で、一度唐崎がいなくなった部屋を見せてもらったんだ。いなくなったそのままの状態だね。そしたら布団が敷いてあってそこに薄い毛布も掛けられてたんだけど…その毛布の下に唐崎の寝巻きが上下綺麗に揃えてあったんだ。まるで寝てる間に唐崎の体だけがそこから消されてしまったみたいに」

牧田は不安そうな表情で語る。俺にも少し話は見えてきたが……少しだけだ。この男が本気なのかどうかもまだわからない。俺が訝っていると、牧田は自分の鞆の中を探りながらいう。

「問題はこれなんだ」

彼はそこからノートを取り出す。そしてページをパラパラと繰る。「これだ」といって彼は手を止める。彼はそのページを指し示しながらノートを俺に渡す。

「唐崎のノートだよ。彼は詩を書いたみたいなんだ。で、それが彼の書いた最後の詩みたいだ」

見ると確かにそこには、何かの詩が書かれている。随分と乱雑な字だが読めなくはない。タイトルは「カーテンでもいい」。

オレはただ君を見てるだけ 遠い遠いところで
抱きしめたい 口づけたい そばに寄り添いたい
でも嫌われるのが怖いから やっぱりキヨリはつめられない
いっそオレは君の部屋のカーテンになりたい
いつもいつでも君をそばで見つめてられるから
言葉は交わせなくても
朝に開かれ、夜に閉じられ、そんなふうにアイサツできるから

君の笑顔も泣き顔も寝顔も見たい
美しい君のその顔の移り変わりは オレには素敵なストーリー
そのストーリーを追いかけていたいから やっぱりオレはカーテンになりたい
ジャマな光をさえぎったり 部屋の温もりを保ったり 少しは役に立つから
ずっとそばにいるから ずっと見つめてるから
見たくない君の姿を目にするときまで

「どう思う？」と牧田が俺の反応をうかがう。

「柄でもないことしてるものだね」と俺は正直な気持ちを零す。

「いや、そういうことじゃなくて……どう思う？」

「君が俺に何を訴えているのかはわかったよ」と俺はできるだけ冷静に応じる。「つまり唐崎は好きな人の部屋のカーテンになりたいという詩を書いた。それで神様か何かがその願いを叶えてしまって、唐崎は三島江ゆかりの部屋のカーテンになった。君はそう言っているんだろ？」

「まあ…そういうことだね」牧田は少し恥ずかしそうに反応する。自分ではその可能性を信じてこんでいるのに、他人に改めて言葉にされるとやはり恥ずかしいようだ。

「これもあったんだ」と牧田は突然に言い足す。揺らぐ自分を咄嗟に支えようとでもするような慌てた感じで。彼は鞆から出したピンクの紐のようなものを俺に渡す。

「これがどうしたんだ？」渡された俺はそういってそれをぼんやり見つめる。

「なんていうのか知らないけど…カーテンを束ねて留めておくやつみたいだ」

「カーテンタッセルだね」と俺は教えてみる。

「カーテンタッセル？」これはカーテンタッセルっていうのか…って顔で牧田はぼんやりと俺を見つめる。が、やがて気を取り直すようにして続ける。「まあ、とにかくこのカーテンタッセル

が唐崎の部屋に残されてたんだ。唐崎のパジャマの袖口辺りを巻くような感じで。唐崎の部屋のものかと思ったけど、それ唐崎の部屋のカーテンとは色が合わない。唐崎のお母さんに聞いてみたら『知らないわ、うちのじゃないみたいよ』ってことだった。だからもしかしたら…」

「三島江の部屋のものだって言いたいのか？」

「そりゃもちろんわからないけどさ…」牧田は躊躇いながらも何かを思い出すように続ける。「でも三島江も言ってたんだ。ちゃんと話したわけじゃないんだけど…僕と三島江の家はすぐ近所です。時々登校中に会うんだ。それでなんとなく気になったからさりげなく聞いてみた。『最近カーテンに何か変わったことはなかったかな？』って」

「その質問は絶対に『さりげなく』はなかったろうね」

「まあ、でもどう訊けばいいかわからないからさ。そう訊いてみたんだ。そしたらさ、言ってたんだ。夜中にカーテンの辺りが激しく光ったことがあるって。雷かと思って見てみたけど空は全然晴れてたって。で、後で確かめるとそれは唐崎が消えたのと同じ日だったんだ」

「それで」俺は気になって尋ねた。「カーテンタッセルは？ 三島江ゆかりの部屋のカーテンタッセルはどうだったんだ？」

「……………訊けなかった」

「どうして？」

「だって……最初の質問で気味悪がられてたし。そもそもそんなに親しくしてるわけでもないし……っていうか小学校の低学年までは一緒に遊んだりもしたけど…なんかいつのまにか向こうだけ大人になってるみたいで、でも僕は身長もいまいち伸びなくて、向こうはなんか人気もあって、それなりに華もあるけど、僕は冴えない情けない男で……」

「何の話をしてるんだよ？」と俺は思わず話を止める。

「いや、だから、全然僕と彼女はステージが違うというか、対等な関係じゃないんだ」

「見ればわかるよ」五頭身でいがぐり頭の牧田は、未だに中学生の雰囲気やを拭い去れていない。

「とにかくそんなんだから……それ以上つつこんだことは訊けなかった。なんか変な目で見られていたし…」

「まあ、そうだろうな」

「そんなこんなで、」と牧田は改めて告げる。「唐崎はカーテンになってるらしいんだ」

俺は改めて牧田を観察する。…冗談を言っている顔には見えない。不安そうで、怯えているようでもあって、そして財布を失くした人のようにそわそわと落ち着きがない。こんな調子でカーテンに何かあったかとか言い出したら、そりゃ大体の人は気味悪がるだろうな、と俺は合点する。

。

「で、どうしようっていうんだよ？」と俺は尋ねる。

「どうしようって……決まってるじゃないか？ 助けないと」

「助ける？」

「だってこのことを知っているのは僕だけだし…いや、一応話してはみたんだ。警察に。でもやっぱりなんか僕が『かわいそうな子』みたいに見られて、ちゃんと取り合ってくれないし。唐崎の親にも話してみようとしたけど…なんかやっぱりいえないし…」

「わからないな」と俺はいう。

「何が？」

「いや、ほとんどわからないんだけど…まあでも、今わからないと思ったのはそれをどうして俺に話したのかってことだね。俺は君とそんなに仲良くなった覚えはない。唐崎ともクラスメイトというだけで、殆ど話したこともない。そんな俺にどうしてそれを話すんだ？」

「だって…」牧田は伏せていた目をまっすぐ俺に向けていう。「西面君は変わり者だろ？ なんでも父親が芸人だか劇団員だかやってるとか聞くし…」

「芸人であり劇団員だよ。本当の父親がね」

「本当の父親？」

「複雑なんだ」そういつて俺はまた問い直す。「それより父親がどうであれ、そんなことで俺が変人ってことにはならんだろ？」

「でも西面君自身も…奇行を見せたり、よくわからないことを言ったりしてるじゃないか？ ソフトボールの試合でヒットを打ってさ、一塁を駆け抜けて外野まで行ったと思ったら、そのままグラウンドを出てその日は結局帰ってこなかったりさ。『走馬灯職人っていうのは死に際に今まで作った走馬灯が走馬灯のように思い出されるんだろう』とかいったり。この間も…先生に変な言いがかりをつけてたじゃないか？ 『恐竜が六五〇〇万年前に滅んだとどうして言い切れるんだ？』なんていっちゃってさ」

「言っておくけど」俺は堂々と主張する。「あれは俺が言っていることが正論だよ。だって恐竜がその時期に滅んだっていうことを誰もその目で確かめてないんだよ。その時期以降に痕跡が見つかっていないっていうだけのことで、その時期に滅んだって言っているほうが暴論だ。その可能性が高いっていうなら意味がわかるが、断言するのはおかしいってことだよ。そもそも恐竜がこの地球上に生きていたって証拠すらないんだぜ」

「何を言っているんだよ？」牧田は不思議そうに問い掛ける。「生きていた証拠はあるだろ？ 化石がいっぱい見つかるじゃないか？」

「だからそれは地球上に生きていた証拠にはならないんだよ。もしかしたら恐竜っていうのは宇宙人のペットだったかもしれない。それで死んだらその死体を地球に埋葬していたのかもしれない。だから六五〇〇万年前を期に化石やらの痕跡が見つからないっていうのは単にその時期に宇宙人の間で恐竜ブームが終わったというだけのことかもしれない」

「非常識な話だね」と牧田は少し嘲笑うような目を見せていう。

「常識に捉われて、その他の可能性から目を逸らすような愚かな生き方はしていないからね、俺は」

「だから君なんだよ」牧田は今度は嬉しそうな目を見せていう。「実際に君は今も僕の話ちゃんと聞いてくれた。他の人ならそうはいかなかった。君も不思議そうな目を見せたけどさ、それ以上に興味深そうだった。だから…頼むよ」

俺は牧田から目を切って考える。確かに…牧田の言うとおりに、俺はいわゆる変人だ。そして…不思議なことは好きだし、それを探っていくことは俺の楽しみの一つでもある。それに……このところ気持ちも晴れない。一つ確かなのは…動いてみないと何もわからないってことだな。

「いいだろう」と俺は呟くようにいう。

「やっぱり」と牧田は顔を綻ばせて喜ぶ。「君は信じてくれたんだね？」

「信じたわけじゃないよ。ただ…神様っていうのは結構無茶苦茶するものらしいからね。確かめたい気持ちはある。『唐崎がカーテンになったかどうか』っていうことはね。それに…」

「それに？」

「もしかしたらこれは俺にとっても何かのきっかけかもしれない」

「どういうこと？」

「俺も今朝見たんだよ。片目の白猫をね」

西面真人の楽しみ（14時）

すぐに俺たちは自転車に乗って唐崎の家へ行く。どこか古めかしい住居が建ち並ぶ集落にそれはある。インターフォンを押すと、たっぷりとした間を置いて、唐崎の母親が出てくる。昼寝の途中に起こされたような、締まりのない表情で。容姿はどことなく唐崎に似て…おおざっぱなつくりになっている。そして…髪には「おばちゃん」であることをアピールするようなパーマが掛けられている。

「何かわかったの？」と彼女は牧田に迫る。

「いえ…とくにわかったことはないんですけど…」迫力に押されているのか、彼は言い訳をするようにしゃべる。「まだ武雄君は戻ってないんですか？」

「そうよ。あれっきりよ。本当に困ったものね。もう三週間でしょ？ ただの家出だと思ってたんだけどねえ。ほら言ったでしょ？ 前にもこういうことがあったんだけど、それは本当にただの家出で。その時はお祖母ちゃんのところに隠れてたのよ。お祖母ちゃんも孫には甘いからねえ、『いつまでだってここにいていいんだよ』とか言ってたらしくて、いやいや、『いつまでだっていいわけないだろう？』って話なんだけどね。その時はだって中学生だったよ、義務教育だったの。ま、だから今回もまたそんなところかと思ってたんだけど…どこにもいないみたいなよねえ。警察にも届けてあるんだけど、本気で探してくれているのかしら？ 体だけは私に似て丈夫だから、野垂れ死んでるってことはないと思うけど…それより留年になっちゃうわ。それが心配なのよ」

「三週間の欠席ならまだ留年になることはありませんよ…」と何故か牧田は恐る恐る告げる。

「でも学校から連絡あったのよ」とおばちゃんは続ける。「この間期末テストだったんでしょ？ それをまるごと休んじゃったから、明日から追試を受けなきゃいけないらしいんだけど…ねえ？ 当の本人がいないじゃないのよ。私が受けるわけにもいかないしねえ」

おばちゃんは冗談とも本気ともつかぬ表情でそうぼやく。

「大丈夫ですよ」と牧田はおばちゃんを慰めようとするかのようにいう。

「何が大丈夫なのよ？」とおばちゃんは凄む。

「あの…今日は彼を連れてきましたから…」と牧田は俺を紹介する。

「どうも」と俺はおばちゃんに会釈する。

「あんたは役に立つのかい？」とおばちゃんは失礼な態度で応じる。「牧田君のほうは何の役にも立たなかったよ。あんたは大丈夫なの？」

「なるほど」と俺は思わず思ったことをそのまま漏らす。「唐崎武雄ががさつなのは親譲りだったみたいですね」

「何？」おばちゃんは今度は俺に凄む。「あんた随分生意気みたいだね？」

「俺も親の教育が悪かったんです」

「あんた喧嘩売りに来たのかい？」

「彼は推理力がすごくあるんです」と牧田が慌てて俺をフォローする。「だから今日は来てもらったんです」

「なんだ、その設定は？」と俺はつい牧田に尋ねる。

「いいじゃないか、それで」牧田が小声で俺を制す。

「まあ、そうだねえ」とおばちゃんが独り言のように話す。「あんたともめても仕方ないんだよ。若いうちはどうしたってみんな生意気なものだしね。でもあんた生意気な態度を取るんなら、それだけのことしてくれなきゃ駄目だよ。できるのかい？」

「試してみないとわかりませんよ。だからここに来たんです。とりあえず部屋を見せてもらえますか？」

「いいけどね。だったらあんた今日中だよ」

「今日中？」

「今日中にあの子を見つけだしておくれよ」

「わかりました」

「そんなこと約束していいの？」と心配そうに牧田が俺に訊く。

「いいよ、別に。俺もこんなことに何日も掛けたくないからね。それに今日だめなら…俺はこの人と会う機会はないだろうし」俺は牧田にそう囁いてから、改めておばちゃんに問う。

「じゃ、お邪魔していいですか？」

「いいわよ、もう。面倒くさいから。好きにしなさいよ」本当に面倒くさそうにそう言って、おばちゃんは俺たちを部屋へ通してくれた。

「クラスメイトというだけで部屋へ通すなんてさ、本当にかげつだよな」と唐崎の部屋で俺は牧田に呟く。おばちゃんは居間のほうに既に戻っているが、

「聞こえるよ」と牧田がシーと人差し指を口元で立てながらいう。「君もしかして…唐崎のことは嫌いなのか？」

「好きも嫌いもないな。殆ど話したこともないし」

「どうして話さない？」

「合うか合わないかでいえば、どう考えても合わないからね。もちろん自分と全然違うタイプの人ともそれなりに上手くやっていくことはできるだろう。でも全然違うタイプの人とは誤解やすれちがいが生じやすい。その結果、抱えきれないほどの苦しみ、癒えることのない傷を負うこともある。だから慎重になっている。そんなところだ」

「なんか、よくわからないな」

「いずれわかるよ、嫌でもね。そういう種類のトラブルやら傷やらは誰にもちゃんと用意されているみたいだから」

牧田のぼんやりとした顔を横目に、俺は部屋を探る。唐崎が消えたときの布団やら寝巻きやらはもうさすがに片付けられている。他は彼の勉強机があり、テレビがあり、筆筒があり…まあ普通の部屋だ。そして俺はカーテンに目をやる。どこにでもありそうな安物っぽいライトグリーンのカーテン。牧田から預かっていた淡いピンクのカーテンタッセルを手にとって見比べる。確かにこのタッセルはこの部屋のものではなさそうだ。そして気付く。結局確認は取れたが…新しい発見は何もない。

「そうだ」と俺はつい両手を合わせて声に出す。「ここに来ても仕方がないんだ」

「ここに来ても仕方がないって？」

「三島江ゆかりの部屋へ行かないといけないんだ」

「三島江の？」

「だってそうだろう？ その部屋のカーテンになってるかもしれないわけだろ？ そこに何かの痕跡があるかもしれない。それかタッセルで巻いてみたり、あるいはそのカーテンを揺さぶったり叩いたり…何なら火でも付けてみれば何か変化は生じるかもしれない」

「君は結構無茶苦茶なことを言うね？」

「仕方ないだろう。無茶苦茶な状況かもしれないんだから」

「それに…いきなり押しかけて三島江が部屋へ上げてくれると思うか？」

「どうにかなるさ。方法っていうのはね、目を凝らしていれば見つかるものなんだよ」

「唐崎の部屋へ上がるのとはわけが違うよ？」

「いいから、案内してくれよ。三島江ゆかりの家へ」

三島江ゆかりの喜び（15時）

せつかくの日曜日だってのに…なんか冴えない。ずっとパソコンに向かってゲームなんかしちゃってる。何で私こんなにオセロばかりやってんだろ？ こんなにオセロが好きだったかしら？
ちがうちがう。そんなに好きでやってるんじゃないのよ、別に。

由美子も千春も彼氏ができちゃってから、土日はデートばかりしてる。いつも一緒に遊んでた私はあぶれてオセロばかりしている。あの子たちのデートの回数×三〇ぐらい、私はオセロをやっちゃっている。なんかやだやだ、冴えない、冴えない。そう思いながら続けるオセロ。
はあ…

私にはどうして彼氏ができないの？ モテないわけでもないのに。本当よ。だってこの間だってデートに誘われたのよ。「今度のお祭り一緒に行こうよ」って。でも「なんで私があなたと一緒に行くの？」って聞き返しただけで、相手が怖気付いちゃって…それっきり。ちょっと聞いてみただけなのに…どうしてそこで引き下がっちゃうわけ？ もうわかんないわ、こんなの。

由美子や千春に紹介してもらって手もあるけど……もう無理よね。私が余計なこと言っちゃったから。「由美子の彼氏ってフリーターなの？ なんか残念ね」とか「千春の彼氏って三十歳？ 考えらんないわ！」とか。……別に違うのよ。思わずそういっちゃったけど、別にそんなこと思ってないわよ、私だって。

だってあの子たちが自慢げに話してくるから。なんか引け目を感じちゃって、気持ちが押しつぶされそうになっちゃって。それを咄嗟に押し返そうとして声を発するけど、「わー！」って叫ぶわけにもいなくて。だから目の前にある言葉を無理に否定しようとして、そんなこといいちゃったけど……あれは私の気持ちじゃないのよ。どうして私「良かったね」とか「うらやましいなあ〜」とかいえなかったんだろ…

でもね。私だけが悪くって？ あの子たちの言い方だって、何かの仕返しみたいな雰囲気なかった？ はっきり言って私のほうがかわいいもの。ずっと私のほうがモテてきたもの。その借りを今ここで返すみたいな。そんな言い方じゃなかったかしら。それにしてもなんでみんな男に抱かれたってことをあんなに誇らしげに語るの？ 大人ぶっちゃって、こっちを子供扱いして。悔しくもなるわ。私だってそりゃ抱かれないし…。うん、どうせやるなら早いとこやっちゃいたいし。

もちろんそんなこと気にするようなことじゃないわ。人それぞれタイミングってものがあるし、人の価値って体験の早い遅いで決まらないし。でも、そういう理屈っていくら正しくても今の私の気持ちを救ってくれないのよ。見えない何かの圧迫から逃れようと思ったら…抱かれるしかないのよ。抱かれないと……由美子や千春に対しての引け目が消えてくれないのよ。こんなの利口じゃないのはわかってる。でも……抱かれないわね。抱かれればこんなことウダウダ考えなくて済むんだもの。

駅前辺りうろついてナンパでも待ってみましょうかしら。そして声掛けられて、ついて行って、抱かれて……駄目ね。そこまでチャラくはなれないのよね。ってか怖くない？ 身元はわかってるほうがいいわよね。

だから学校の誰かでいいんだけど……ああ、でも同じクラスの子なんかはきついかもね。そりゃ上手くいっているときはいいわよ、でも上手くいかなくなったときなんて…。考えただけで居心地悪いわ。周りも変な目で見るところだし。

隣のクラスぐらいがいいかしら？ そのぐらいなら駄目になったら駄目になったで、気にならない程度の距離置けるし。視界に入らないだろうし。まあでも念のためもう一つ隣のクラスぐらいがいいのかしら？ 隣の隣のクラスの男。どうだろう？ あんまり顔も知らないわね、そういえば。まあそのぐらいがいいのよ、きっと。

私はパソコンから離れ、ベッドに寝そべる。ちょっと休もう。暇つぶしのオセロも結構疲れるものなのよ。そして……無為に時間が過ぎていく。月曜日に休み何してたか聞かれたら何て答えよう。洋裁でもやってたって言おうかしら？ なんて暇人だとばれることを隠すために趣味を捏造しようとしているの、私は？

ピンポンと呼び鈴がなる。誰？ お客さん？ 私に？ 違うでしょ。誰か出てよって思っても今は私しかいない。今日はお父さんもお母さんも帰りは遅くなるって言った。友達の結婚式だって。…いいわよ、出てやるわよ。暇だから。

インターホンを通して、玄関前の客人の顔を確認する。……見たことがあるような、ないような、記憶とつながりそうでつながりきらない男の顔が見える。受話器をとって、「はい」と声を発して見る。男は落ち着いた口調でカメラに向かってしゃべり出す。

「三島江ゆかりさんいますか？」

「はい？」名前を呼ばれて私はうろたえる。男は続ける。

「同じ学校の二年一組のものです」

二年一組？ 隣の隣のクラスじゃない？ 誰？ 玄関前の映像を改めて覗き込む。よく見ると男が二人いる。一人は…あいつだ。牧田だ。なんだ牧田かと、少し落ち着いてしまうが…もう一人は…誰だろう？

「わけがあって来ました」と男は言い足す。

「ちょっと待ってください」と丁寧に私は告げて、ドアを開ける。

小柄な牧田をお供にして、その男は強い眼差しで私を見つめる。そして若い割に色気のある声でいう。

「カーテンを見せてもらえますか？」

「は？」と私が戸惑うと、

「いや、あの、違うんだ」と牧田が口ごもりながら割って入る。「彼は西面真人っていうんだけど…僕と同じクラスでさ。その彼が君と話をしたいんだって。その…彼は君に興味を持ってらしくて」

「私に？」

「また勝手なことを…」と、西面って人がちょっと困ったような顔で牧田を見る。照れているようにも見えるわ…。そうね、照れてるのね？ そういえば、前に牧田がほのめかしてたわ。私のことを気に入っている人がいるんだって。つまり……そういうこと？ この西面って人が私を気に入っている人ってこと？ この人はどこかで私を見かけて惚れちゃってて。私は小学校から一

緒だってことだけで牧田と仲がいいと思われてて。で、彼は牧田を通じてどうにか私に近づこうとしている、っていうそういうこと？　そういうことなのね。ただ…「カーテンを見せて」ってのはどういうことかしら？

「部屋へ入れてもらえると助かるんだけど」と西面君は堂々とした口調でいう。なんてストレートな人かしら。でも、そんな…駄目よ。殆ど初対面でいきなり部屋へは上げられないわよ。ものには順序ってものがあるんだからね。もう…ってあれ？　私ちょっと乙女チックになってない？

ま、仕方ないわね。だってこの人かっこいいもの、うん。

「部屋は駄目」と私はなるべく優しくいう。引き下がられてもつまんないし。「だから、どこか別の場所で話しましょうよ」

「じゃあ、ここで話そう」と西面君はいう。

「ここ？」玄関で立ち話ってなんかムードがないわね。この人あんまり女性に慣れてないのかしら？「ここじゃなくて、別のどこかに行きましょうよ」

「別のどこか？」

「なんか、最初はやっぱり…映画とか」

「映画？」と西面君はきよとんとする。そんなにおかしなこと言ったかしら？　映画って最初のデートの定番でしょ？　何をそんなに意外そうにしてるの？

西面君は牧田と顔を見合わせる。二人とも困ったような顔をしている。でもやがて、西面君が覚悟を決めたような表情で私の目をじっと見つめていう。「わかった。君が望むならそうしよう」

三島江ゆかりの喜び（16時）

そして私たちは映画館で映画を見る。左隣に西面君。その向こうには牧田…。どうして牧田もついてきてるの？ もう役目は終わったんじゃないの？ まあいいわ。最初はそのほうが楽かもしれないし。

実際彼、緊張しているのかもしれない。ここまで来る間もなんかよくわかんないことしか言っていないし。「部屋でしか確かめられないことがある」とかいつちゃってさ。「とりあえず映画を見よう」ってなんかノルマを果たすみたいな言い方だし。映画を見るのは目的ではないって感じ？ じゃあ彼の目的って？ 私？ 私が彼の目的。そうよね。そういうものよね。だから映画なんか何だっていいのよ。だからこんな…あんまり有名ではなさそうな映画を私は今見てるのね。西面君がスタッフだけ確認していかにも適当に選んでくれた、明らかにB級のラブストーリーを

。 どうでもいいと思いつつも、頭の中でストーリーを整理する。後で会話に困らないように。

舞台はお弁当工場。そこその規模で…従業員はざっと二〇〇名ほど。

そこで働くサトカとタイジは互いに想い合っている。

でもすれちがいや誤解が重なって、二人はなかなか結ばれない。

最初はサトカに彼氏がいたし。

タイジに彼氏と別れるようにいわれて、せっかく別れたのに、そのことをタイジに伝えられないし。

いつもサトカと一緒にいる麦下って男が、タイジに嫌がらせをしてサトカに近づけないようにするし。

麦下はサトカが彼氏と別れたことをタイジに伝えないし。

もちろん自分がタイジをサトカから遠ざけているってことをサトカに伝えないし。

それでサトカが苛立っているときに、フワコって女が余計なことを言うし。

「タイジはいつも私にところに来て、私を口説いている」ってなことを。

もちろんサトカは怒る。「私を別れさせておいて、他の女を口説くなんて最低。私を弄んだのね。頭にきた。こうなったら私は麦下とつきあってやる。ざまあみろ！」

そうしてサトカと麦下は付き合いだして。

タイジは噂でそのことを聞くけど、何も知らないタイジはわけがわからなくて。

タイジはサトカと話し合おうとするけど、サトカはタイジの言葉を一切聞こうとしなくて。

そんな態度にタイジも腹を立てて「なんだ、この女は！」と見切りをつけて。

やがて麦下はサトカにプロポーズして。

サトカは焦るように麦下との結婚を決めて。

でも結婚式の数日前、偶然にタイジはサトカに会って。

サトカとタイジは何も言葉を交わすことなく結ばれて。

でもタイジはサトカを奪うわけではなく、それ限りで遠くへ消えて。

サトカは仕方なくそのまま麦下と結婚する。

タイジの子供を宿したままで……チャンチャン。

まあ、なんだかんだあるけど、かいつまんでいうとこんな話よね、これ。コメディータッチに仕上げているけど、現実だったら結構シャレにならないんじゃないの？ まあでもみんな自業自得かしら。サトカはなんだかバカみたいだし、麦下はすごく卑劣だし、フワコはとにかくいや～な女で。で、タイジは……何を考えているかわからない感じよね。ちょうど、そう、この人…西面君みたいで。何を考えているのかいまいちわからないから女は不安になっちゃうのよ。でも…何を考えているかわからないからちよつと惹かれたりもしてるんだけど…

そうして私は感想を一通り頭の中でまとめていたけれど、西面君は映画館を出ると、それにまったく触れずに言い放つ。

「じゃ、君の家へ行こうか」

「もう…、私の部屋へ来て何する気なの？」とちよつと甘えた口調で私は返す。…これじゃまるで私が誘っているみたいじゃない？ ほら、牧田が意外そうな顔で見てるわ。そら意外でしょうよ、あなたにはこんな姿見せたことないものね。

「君の部屋のカーテンを見たいんだ」と西面君が続ける。またカーテン？ 何なの、そのこだわりは？

「どうしてカーテンを見たいの？」と私は尋ねてみる。

「牧田から聞いたんだけど」西面君は探るような目で私を見据えながら切り出す。「君の部屋のカーテンが光ったことがあるらしいね？」

「ああ」…そういえば前にそんな話を牧田にしたわね。

「俺はそういう不思議なことが好きなんだ。それで一度見てみたいと思っけさ」

「でも…」私は思い出しながら伝える。「カーテンそのものが光ったわけじゃないわよ。だってカーテンが光るわけないし。たぶん外の何かの光よ。何だかわからないけど」

「でもそれを見てみたいんだ。自分の目で確かめたい」

「見ても同じよ。だってカーテンには何の変化もないんだから。だからあれは何かの間違いよ。私のただの錯覚だって」

「そうか…」

西面君は残念そうに肩を落とす。何か悪いことしちゃったような気がして私も思わずうなだれる。でもすぐに西面君は何かを思いついたように視線を上げて語りだす。

「本当のことをいうとさ、俺は将来インテリアデザイナーになりたいんだ。特に興味があるのがカーテンなんだ。それで参考としていろんな人の部屋のカーテンを見てる。君みたいにセンスの良い人のカーテンをね。そういうことなんだ。だから…いいかな？」

…何かしら、この取って付けたような理由は？ はは～ん、わかった。この人嘘を付いているのね。本当は私の体が目当てなんでしょうけど、それをあからさまに迫ったら、嫌われちゃうって思って。それでそんなことを言っているのね。そういうものらしいもの、何か適当に口実を設けて、部屋へ誘ったり、部屋へ入ったりするんだってどっかで聞いたわ。だから…さっきのカー

テンが光った話なんかもきっと本当はただの口実だったのね。

嫌じゃないんだけど…でもやっぱり、

「今日は駄目よ。だって私たち今日初めて話したんじゃない。やっぱり何回かデートして、それからでしょ…ねえ？」

「ちなみに」と西面君は表情を崩さずにいう。「何回目なら良いんだ？」

「何回目って……三回目ぐらいかしら」

「何故三回目？」

「え？」何故って…「だってみんなそのぐらいじゃないの。そういうのって…」そうでしょ？相場って三回目ぐらいでしょ？ そのぐらいならはしたないとか思われなくていいでしょ？ たしかに…私どうして他の人にどう思われるかをこんなに気にしてるのかしら？ でも仕方なくない？気持ちって形がなくて、水みたいなもので、水の形って容器によって決まるでしょ？ 海の形って陸の形によって決まるでしょ？ 波ががんばって少しづつは陸も削れるかもしれないけど、それってすぐにできることじゃなし。だから…どうしたって周囲の存在に影響されちゃうわけで…

「世間のことなんか気にするなよ！」と西面君は一段と強い口調で訴える。突然現れた新しい陸が私の海の形を変えていく…「もしもだよ。最初の機会が最高の機会だとしたら、みすみすそれを見逃すなんて馬鹿げているだろ？ さっきの映画も見たらどう？ タイジもサトカも戸惑ったり躊躇ったりしてるから、結局ちゃんと結ばれなかったらどう？ 二人とも愛し合ってるにも関わらず」

やだ、この人映画の影響を受けているのかしら？ 結構純粋なのかも。

「でも…」と私が迷っていると、

「よし、わかった」と西面君が続ける。「いったん解散だ。君は家に帰ればいい。俺も帰る。それからそうだな…十九時だ。十九時に君の家へ行く。それが二回目のデートだ。二回目なら『三回目ぐらい』ということにもなるだろう。問題はない」

こじつけが始まったわ。……でも、なんでかしら。首を横に振れない。

「君は迷っているのかもしれないけど、俺にはもう迷いはないんだ。俺はもっと…君と一緒にいたい。君のことをもっと知りたい」と彼は追い討ちを掛ける。

「ちょっと待って」と牧田が西面君に問い掛ける。「君さっきから三島江を口説こうとしてないか？」

何言っているのかしら？ 口説こうとしてるに決まっているでしょ？ わかんないわけ、この坊やは？ 西面君の「だって他に方法があるか？」っていう返答はなんかちょっと意味わかんないけどさ…

「いいね？」と西面君が私に澄んだ目で迫る。

「いいけど…」と私は思わず頷く。だって結局この人かっこいいもの。その理由だけで今の私には充分なのよ。それに部屋へ上げるぐらい何よ？ ただ部屋に上げるだけじゃない。そこまでは何もやましいこともないわよ、そこまでは…

「よしそれじゃあ…」西面君が牧田に伝える。「君は唐崎の部屋で待機だ。俺はいろいろ試して

みるから、変化があったら連絡をくれ」

「唐崎のおばちゃんに一日に二度会うのはきついなあ」とか言いながら二人は連絡先を交換している。話の内容はよくわからないけど、まあ私には関係のないことでしょうね。

三島江ゆかりの喜び（19時）

部屋を掃除して待っていると西面君がちょうど十九時に来た。ドキドキしながらも覚悟を決めて私は彼を二階の自分の部屋へ案内した。彼は部屋をキョロキョロと見回して…カーテンで目を止める。そのカーテンに歩み寄りながら、何かを思索しているような表情で両開きかあ」と呟く。そうか、彼はさっきの嘘の辻褄を合わせようとしてるのね。

「カーテンタッセルは？」と不意に彼が訊く。

「カーテンタッセルって？」

「カーテンを束ねる紐だよ。片方はそっちにあるけどさ」と西面君は窓の右脇に掛かっている紐を示す。

「ああ、あれね」

「もう一つは？ もう一つあるはずだろ？」

「もう一つ？」……そうね、もう一つあったはずよね。でも…「わかんない。いつのまにかなくなってみたい」

「なくなった？」

「そうみたいね。私あれあんまり使ってなかったから…わかんないけど…」

「いつから？ いつから見かけてない？」何故か彼は重大な事件の捜査でもしているように真剣な目で問い掛ける。

「覚えてないわ…そんなの。でも、結構最近かしら」

「お茶が飲みたい」と彼は唐突に訴える。「催促しているわけじゃないけどね」

そう催促された私は一階へ降りる。やっぱりあの人も緊張してるんだわ。なんだか上手く喋れないみたい。可愛いもんね。

紅茶を入れて戻ってきた私は「どうぞ」と丁寧にお盆に乗つけたグラスを渡す。彼は「ありがとう」と礼を言いながら、またカーテンに目を凝らす。つられて私もその視線の先を追う。あれ？ カーテンが開けてある。っていうかカーテンがカーテンタッセルに束ねられて留めてある。左右両方とも。さっきまで左側のカーテンタッセルはなかったはずなのに。

「それ…」と左側のカーテンを示して私が声に出す。

彼は親指で背後のタッセルの辺りを示して尋ねる。

「これかな？ この部屋のカーテンタッセルってさ？」

「そうよ、それよ！」

「落ちてあったから付けてみた。でも連絡は来ないな」

「ああそうなんだ。ありがとう。見つけてくれて」連絡は来ない？ 何の話？ それにしても、「それどこに落ちてたの？」と私は訊いてみる。

「ああ、テレビの裏…」

「テレビの裏？ そんなところに…」

「いや、箆筒と本棚の間…」

「箆筒と本棚の間？ そんなところに…」

「いや、ベッドの下…」

「ベッドの下？ そんなところに…」

「どこならいいんだよ？」と何故か彼が怒る。

「どこって…別にどこでもいいわよ」私は少し混乱しながら応じる。

「お菓子も欲しいな」と彼は場を取り繕うかのように告げる。「催促しているわけじゃないけどね」

私はまた一階へ降りる。戸棚を探してみる。これっていうのがない。冷蔵庫を見て…コーヒーゼリーはあるけど…紅茶には合わないかしら？ どうしよう？ 困るわね。あっ、バームクーヘンがある。仕舞い忘れたのかテーブルの上にバームクーヘンが居座っている。彼の口に合うかしら？ っていうかバームクーヘンってどうやって出すの？ 切ってから出したほうがいいのかしら。

私は普段全然手にしない包丁を使ってバームクーヘンを切り分ける。食べやすいぐらいの大きさを狙って。面倒なことだけど、やってみるとちょっと楽しいわね。うん、こういうの意外と悪くないわ。好きな人のためっていうのが良いのよね。あっ、私もうあの人のこと好きになっちゃってるみたい。駄目駄目、あんまり意識したら、私までごちなくなっちゃう。あの人があんな調子なんだから、私はもっとしっかりしないと。

部屋へ戻ると彼は携帯で通話中らしい。「煙が出た？」と驚いている。私が戻ってきたのに気付いたようだけど、彼は引き続き何かを話す。あれ？ カーテンが今度はまた閉じられている。っていうかちょっと待って。何だか焦げ臭くない？ ……気のせいかしら？ 一瞬匂った気がしたけど…今はもう匂わないわね。どこかに消えてしまったみたい。錯覚だったのかしら？ そうね。だって火なんか使ってないでしょうし。え？ まさかタバコ？ でも吸殻とかそういう痕跡もない。大丈夫。思い過ごしよ。

そう言い聞かせながら私は床にペタンと座って彼を見上げる。やがて彼も電話を終えてクッションの上であぐらをかく。

「今の何の話？」バームクーヘンを差し出ししながら、私は平静を装って尋ねてみる。

「少しだけ煙がどこからともなく出たらしいんだけど…でも出元がよくわからないらしい」

「どういうこと？」

「いや、そういう連絡があったんだ」

「そういう連絡？」ボヤ騒ぎでもあったのかしら？ こんな湿っぽい季節に？ と思いながら私は適当に返答する。「なんか大変そうね？」

「そんなに大変でもないようだった。はっきりと感じられないぐらいの煙だったみたいで。だからまだ決定的なことは何もわからない」

「そうなんだ」と私は相槌を打つ。何でだろう？ 会話がグラグラしてる気がする。互いに言葉を積み重ねていくけど、それが少しずつズレてるから、不安定になっちゃうってことかしら…

「それで」と私はきちんと話をしようと思って少し慎重に彼に尋ねる。「どこの話なの？」

「どこって？」

「煙が出たっていうのは？」

「唐崎武雄の部屋だよ」彼はどこか試すような口ぶりでそう答える。

「唐崎武雄？」

「知らないの？」

「知らない…」っていうか聞いたことはあるような気がするけど…誰だったっけ？

「知らないのか…」と彼は意外そうな表情を見せる。まるで当然知っているだろうと思ってみたいいな…。どうということ？ 私と何か関わりがある人なの？ 私が訝っていると彼が続ける。「向こうは君のことをよく知っているみたいだから」

向こうは私のことをよく知っている？ でも私はその人をまるで知らない。一方的な関係？ しかも私がその人を知らないことが意外そうに思われてる。…その人は、親しい間柄でないと知りえないようなことまで知っているってこと？ え？ まさかストーカーだとか？ いや、まさかね。それはないでしょ。

「食べていいのかな？」と彼がバームクーヘンを指しながら不意に訊く。

「いいわよ、もちろん、どうぞ」

「いただきます」無邪気な笑顔で言ってから、彼はそれに手を付ける。一口モグモグとほうばって、「美味しいな、これ」と呟いて。なんか…こうやって見るとのんびりした人ね。

「ところで」と彼が何か思いついたみたいに切り出す。「君はどのような男性が好き？」

「え？」ああ…本題に入ったのね？ そうよね。それは大事よね。上手く答えないと…「そうねえ、やっぱりかっこいい人がいいわ。で、自分をしっかり持ってそんな人」

「なるほど」と西面君が頷く。そしてどこかあらぬ方向へ語りかけるようにいう。「これは諦めたほうがよさそうだ」

「え？ なんで？」ちょっと諦めないでよ！「西面君もかっこいいよ。それに自分をしっかり持ってそうだし。なんか…深みがあるし、すごくいいと思う」

西面君は戸惑った表情でいう。

「ありがとう。なるほど…君は性格も悪くなさそうだ。……あ、これ、ごちそうさま」

「ああ、早いわね」と私はバームクーヘンの皿を乗せたお盆を脇へずらす。なんとなく…私はまた何かを催促されるような気がして、自分から彼に確認する。「他に欲しいものはない？」

「いや、いいよ。いろいろ試したけど、もう他に手が思いつかないし」彼は独り言のように話す。「あと、試すとしたら、あいつの詩の最後の一行だな」

「何を言っているの？」

「君の嫌なところを見たいな。目を背けたくなるような姿を」

「は？」この人どんだけミステリアスなの？ とさすがに不安に駆られたところで彼は私を安心させようとしたのか取り繕うように続ける。

「俺は君のことをまだよく知らないからさ、君のことをもっとよく知りたいんだ。でも良いところは見てればだいたいわかる。だから嫌なところを見たいんだ。君のことを深く知るためにはそのほうがいい」

はあ…趣旨はわかったけど…。私を試しているのかしら？ そうよ、やっぱりこの人だってちょっとは不安なのよ。私がややこしい女だったりしたら困るわけよ。だから確かめておきたいってことよ。私の嫌なところを。だから……なんとか上手い具合にしないと。ちゃんと嫌な

ところを見せないと、また会話がグラグラしちゃいそうだけど…でもそれで嫌われちゃったらもったいないし…ちょうど良い嫌なところってないかしら？ 何よ、「ちょうど良い嫌なところ」って？

「例えばなんだけど…」名案が何も思いつかない私は、自分の嫌だなんて思えるところをそのまま口に出してしまう。「友達とかさ、誰かが何かで成功したり活躍したりしたときにさ、ちゃんと称えられないの。なんか、ひがんじゃって、その子のこと悪くいつちゃうの。せつかくその子は頑張って成果をだしたっていうのに…私はその努力すらも否定するようなことを…」

「例えば？」

「例えば『そんなこと成功して何になるの？ 私はそうはなりたくないわ〜』みたいなことかしら…」

西面君はじっと深い目で私を見ている。なんか私余計なこといつっちゃったかしら？ そう思っ
て私は言葉を重ねる。

「自分でもそういうところ嫌なの。でもそうなっちゃうの。そういうことを言わないと私
がもたないの」私は何故か泣きそうになっている。どうしちゃったのかしら？

「駄目だ、それじゃ」と西面君がいう。「そんな健気な姿見せたら余計に惚れちゃうよ」

あっ、告白だ！ 今の科白は完全に告白よね？

「こんな私でもいい？」って私は上目遣いで彼に尋ねる。

「世の中にはね、嫉妬で他人を深く傷つけたり、陥れたりしながら平気な顔して生
きている人間もいっぱいいるんだ。そういう奴らに比べれば、君は自覚や反省がある分だけマシだよ。断然ね」

「ありがとう…」

「君はきっと…世界一マシだ」

「ありがとう…？」喜んでいいのよね？ 私が不安な顔を見せると彼は優しい目で微笑む。

「……君は本当にかわいいね」と彼は私を言葉で撫でる。「もういいや、いったんカーテンのことは忘れよう」

彼は私に寄り添って、私の髪をそつとその手で撫でてくれた。ここに来て彼の気持ちが私にまっすぐ向かってきているのを感じる。もう余計な駆け引きは要らない。言葉も要らない。彼の目線がそう語っている。そして彼は私にキスをする。私も抵抗しない。もうこれでいい。もう何も考えられない。なんだかんだと思考を巡らしているようだけど、これはルーレットの玉みたいに慣性でカラカラ回っているだけ。私の頭の中でカラカラカラカラ…。やがてその玉は赤い枠か、黒い枠か、どこかで止まるだろうけど、それすら私には決められない。傍から見ればそれは私の決断のように見えるのだろうけど、それはとっくに私の手を離れたものだ。

これで明日からは由美子や千春と対等に話せる。もう先延ばしなんかしたくない。っていうか今の私にとってはそんなことすらどうでもいい。

そうして私は彼に抱かれる。

「大丈夫？」終わってから彼が私に問い掛ける。「痛くなかった？」

「痛かった…」何故か私は正直に答える。「でも気持ち良かった」

「『最初は痛くて段々気持ち良くなる』ってよくいうけど、そういうこと？」

「……ちょっと違う気がする」

「違う？」

「厳密にいうと、痛い所と、気持ち良い所は近いけど別の箇所なのよ。でもなんかしびれて麻痺しているみたいでわけわかんなくなっちゃってて…」私は今恥ずかしさも麻痺しているようで、こんなことを平気で語っちゃってる。

「痛い所は今も痛い。気持ち良い所は最初から気持ち良かった……そういうことかな？」

「そうかもしれない……」でもやっぱりそんなにはっきりはしてない。

「またやりたいと思う？」

「うん…」私はどうしてだか彼に気持ちを伝えたくて、言葉を続ける。「だって痛みもあって、こういう感じなら…痛みがなければ、もっと…」

「だろうね」

「あのさ…」少しだけ不安な私は、彼に縋るように尋ねる。「付き合ってくれるんだよね？」

「もちろん」彼は即答してくれた。

恥ずかしくなったのか彼は私から目を逸らす。その時何かに気付いたのか急にその目は鋭い目になる。思わず私も彼の視線の先を追う。そこでは…大柄な全裸の男が真っ赤な顔でこっちを見ている。私は自分の耳をもつんざくような悲鳴を上げる。

「キャー——」——！！！！

西面君が呟く。

「唐崎武雄……」

「何してやがんだよ！！」

オレは目の前にいる男、西面を怒鳴りつけた。

「それはこっちの科白だな」と西面はこともなげに言い返してきやがった。

オレは…自分の状況に気付いて驚く。オレは元のオレに戻っている。ずっとカーテンになっていたオレだが…目の前でこいつらがいちやつきだして…ベッドの上で裸で抱き合っているのを目の当たりにして…どうにか動こうとして叫ぼうとして…でも夢の中でのことみたいに全然体が動かなくて声も出なくて…。そうだ、ずっと夢みたいだったんだ。ちゃんと何かを考えられなくて、カーテンになったことについてどういうわけだか納得してて…

オレが自分の体を確かめていると、西面はゆかりに「君はちょっと別の部屋にいてくれ。俺が話をつけるから」とか、かっこ付けた口調でいってやがる。ゆかりはシーツで体を隠して、オレを気持ち悪いものでも見るみたいな目で見ながら「やっぱりストーカーだ！！」とかわめいて部屋を出て行った。なんだってオレがゆかりにそんな目で見られないといけないんだ？！ そんなふうには思われなきゃいけないんだ？！ オレが何をしたってんだ！

「なんなんだよ、おまえは！！」思い余ってオレは改めて西面に叫ぶ。

「おまえがなんなんだよ。そんな格好で」と西面がパンツを穿きながら応じる。

「格好はお互い様だろうが！」

「俺が裸でいるのは君とは理由が違う。見てなかったのか？」

「見てたから怒ってるんだろうが！ おまえはゆかりのなんなんだ？」

「わからないのか？ 俺はゆかりの彼氏だ」Tシャツを頭に被りながら西面はそうぬかす。

「今だよな？ 今付き合いましたんだよな？ おまえは…なんだ？ なんだってオレの目の前で…ゆかりを抱いたんだ？ 何でオレがこんな思いをしなくちゃいけないんだ？」

「少し落ち着いてくれ。うるさい」そう言って西面は穿いたズボンのポケットから携帯電話を取り出した。「とりあえず君には服を着てもらおう」

「ああ！？」

西面は携帯電話で通話を始める。「詳しくは後で話すけど…唐崎は今ここにいる。…ゆかりの部屋だよ。何故か全裸なんだ。彼の服を一式持ってきてくれ。靴も。…靴下？ まあ適当に持ってきてくれよ。早くね」

「誰だよ？」オレは尋ねる。

「牧田だ。彼が服を持ってきてくれる」

「牧田？」

「そう、彼が教えてくれたんだ、君が三島江ゆかりの部屋のカーテンになっているってね。感謝するがいいさ。彼がいなければ君はずっとカーテンのままだったんだ」

「ちょっと待て。おまえは知っているのか？」

「何を？」

「おまえはすべて知っているのか？ オレがゆかりのことを…」

「好きなんだろう？ 知っているよ」

「オレがここでカーテンになっていたのも知ってて、おまえはゆかりを抱いたのか？」

「微妙なところだな。その可能性は感じていたが、でももちろん確信はなかった。当然カーテンになっていない可能性も感じていた。だから後は普通の話だ」

「なんだってんだ、普通の話って」

「ゆかりは俺を求めた。俺もゆかりを好きになった。だから抱きしめあった。それだけのことだ」

「それだけのことだと！！」オレは声を荒げる。

「ああ、それだけのことだ」西面はいけしゃあしゃあと応じやがる。「君はつまりただの失恋だ。俺もゆかりも悪くない。君が勝手に覗いてみて、勝手に傷ついたんだ。俺の知ったことじゃない」

「なんだってんだ？　なんでそんな言われ方されなきゃいけないんだ？　オレはこんなに苦しいんだぞ？」

「おまえにわかるか？」オレは声を絞り出す。「好きな女を別の男に目の前で抱かれてよ。俺はそこにいきなり全裸で現れた変態みたいに思われて、悲鳴を上げられて…そんな男の気持ちがおまえにわかるか？」

「わかるわけないだろう、そんなもん」

「なんだよ、その言い方は！？　おまえは最低だよ！　最低な男だ」

「うるさいな。とにかく落ち着けよ、童貞野郎」

「おまえにだけは言われたくねえよ！！！」

「『おまえにだけ』ってなんで俺を目の敵にしてるんだ？」

「わかるだろう！？　自分が何やったかわからねえのか？」

「いい加減にしろ！」と西面が…怒った？

「なんでおまえが怒るんだよ？」

「おまえは俺の女の体をずっと見てたんだろう？　俺はそれが許せねえんだよ。でも俺は怒りを抑えて話そうとしてるってのに、なんだおまえは？」

オレは思わず言葉を失い、西面は言葉を畳み掛ける。

「おまえには自分の気持ちしか捉えられないか？　おまえは自分の裸を、好きでもなんでもない男にこっそり見られていた女の気持ちがわかるか？　考えたことあるか？　なあ、おい？　それにな、ゆかりが好きになる人が…つまりこの場合俺だけど、俺が潔癖な男だったらどうする気だったんだ？　他の男に体を見られた女なんか汚らわしいと思う男だったなら、ゆかりは好きな人に抱かれることができなくなってしまうとこだったんだぞ？　ゆかりの喜びを奪う可能性もあった。それがわからねえのか！」

「なんだってんだよ！　オレが悪いってのか？　オレはだって…カーテンになりたいって詩を書いただけじゃねえか？　それでまさか本当にカーテンになるだなんて思わねえじゃねえかよ？」

「おまえがしつこく願いを叶えろ叶えろってノックし続けたから、神様もやけになっておまえの願いを叶えちまったんじゃないのか！」

「わけのわかんねえこと言ってんじゃねえよ！」

軽蔑しきったような顔で、西面が続ける。

「おまえは本当に、麦下みたいな奴だ！」

「誰だよ麦下って？」

「おまえみたいな奴だよ」

「わからねえよ！」

「真実を伝えれば目の前の相手が救われるのに、自分の欲望を優先してそれを伝えなかった人間だよ」

「仕方ねえじゃねえか？ だってオレは…カーテンだったんだぜ？ なんか夢見てるみたいな状態で…話すことも動くこともできなかったんだぜ？ どうしようもなかったんだよ！」

「それは本当にどうしようもなかったのか？ 本当に何もできなかったのか？ 伝えようとしたのか？ 三週間はあったらろう？ 結構な時間だ。本気になりゃどうにかできたんじゃないのか？ 現におまえは今は元の姿になってここにいるじゃないか？」

「だって…そんなのわかんねえよ。今まで…カーテンになったこともなかったし…」

「だとしても」西面が視線を尖らせていう。「どうにかできるとしたらおまえだけだったんだよ」

「オレは…」

「最低だ」

なんだよ…オレが悪いみたいじゃねえか。オレが悪いのか？ オレが何したってんだ？ どうしてこんなことになった？ オレはちょっとカーテンになりたいって詩を書いただけじゃないか？ こんなのってあるか？ ちょっと言葉に出しただけで…それがきっかけで大きな力に動かされて、オレはちゃんと何も考えられずにいて、そして気がつくとき…こんなふうになんて心を決られてて。オレはこんなふうには生きられないのか？ わからねえよ。わからねえけど…こんなのあんまりだ。

「おまえは永遠にムカつく」そう言い放ってオレは部屋を出る。もう嫌だ。もう耐え切れない。

「それは『一生恨む』ってどういう意味か？」って西面の問い掛けを背中で受け止める。

「キャー——！！」と廊下にいたゆかりに再び悲鳴を上げられる。オレは逃げるように階段を下る。

外に出る。全裸だが仕方がない。門を出ると、そこにちょうど牧田が自転車で乗り付ける。俺は牧田をリアアツで吹っ飛ばす。ガシャーンという自転車の倒れる音が、夜の住宅街に響く。

牧田圭介の哀しみ（22時）

三島江ゆかりの家のドアが開く。西面君が出てくる。三島江と何か言葉を交わしている。何故か西面君は三島江にキスをする。二人はまるで夫婦みたいに見える。僕は自分の頭を撫でる。唐崎に吹っ飛ばされて倒れたときに後頭部を打ったのだが…大丈夫。それほど強くは打っていない。大丈夫…だと思う。

別れが済んだのか、西面君は自分の家から出るみたいな当たり前の顔をして門から出てくる。

「唐崎は？」と西面君が僕に尋ねる。

「帰ったよ」

「全裸で？」

「いや…服は着たよ。ちゃんと渡した…ってというか僕を吹っ飛ばして、自転車籠から零れた紙袋から、勝手に服を見つけて着てた。それから…そこらへんで何かして……帰った」

「そこらへんで何か？」

「そう、そこらへん」と僕は西面君の自転車の辺りを指差す。

見ると西面君の自転車の後輪は明らかに空気が抜けている。

「パンク？」と僕が訊いてみる。西面君が自転車のタイヤを確かめながら答える。

「いや、たぶん空気を抜かれただけだな。バルブキャップがなくなってるし…バルブも緩められているよ。ま、このぐらいで済んでよかった」

「何がどうなってるの？ 唐崎すっごい顔してたけど？」

「とりあえず君の家へ行こうか」

「どうして？」

「空気入れを借してもらおう」

「三島江に借りれないのかな？」

「そろそろ親が帰ってくるかもしれないってさ。君の家近いんだろ？ 行こうよ。歩きながら話そう」

「いいけど…」

そうして僕らは歩きながら話す。並んで自転車を押しながら。

「何にしても」と西面君が切り出す。「唐崎は留年を免れたみたいだな。ま、あいつが明日登校する気になるかどうかはわからないけどね」

「いや、だから唐崎に何があったの？」と僕は再び訊く。

「君のいったことが正しかったみたいだ。唐崎はカーテンになってた」

「なってたっていうのはどういうこと？」

「カーテンと一体化してたようだね。分子レベルで結合してたのか…。あるいは肉体に宿る筈の魂が裏返って、逆に肉体が魂に宿って、その魂が肉体もろともカーテンに含まれてたのか…そりゃ仕組みはわからないけど」

「そうなんだ…」僕はただそう返す。なんせ…よくわからない。

「で、俺はゆかりを抱いたんだ。そしたら、唐崎がカーテンの前に全裸で現れた」

「どういうこと？」

「唐崎は見たくなかったんだろうな。ゆかりが別の男に抱かれて喜んでいる姿を。ほら、彼の書いた詩にあったら？『君の見たくない姿を見るときまで カーテンになっていたい』とかさ。それで…見たくない姿を見たから元に戻ったってことじゃないか？」

「ああ…書いてたね、なるほど」

「それでさ、俺は唐崎と話をつけないといけないと思ったんだけど、まあ話にならなくて…最後は彼は全裸のまま部屋を飛び出してっ。後は俺はゆかりに上手く話して誤魔化した…そんなところだな」

「誤魔化せたの？」

「どうにかなったみたいだ。『どういう手段を用いたのかはわからないけど、俺たちが夢中になっている間に、唐崎は窓から君の部屋に忍び込んだようだ。でも俺がちゃんところしめておいたから、もう大丈夫だ』ってなことを言ったら、『ありがとう、助けてくれて』って言ってたから」

「そんなことで…どうして誤魔化せるんだ？」僕は首を傾げる。

「どうしてって？」

「だって…その場合一番怪しいのは君だろう？ 君が三島江の隙を付いて唐崎を招き入れてたっていう可能性が第一に考えられる筈じゃないか？」

「だって俺はそんなことしてないぜ？」

「そりゃそうだけど…」

「今の彼女はね、俺のいうことを驚くほど信じるよ」

「そうなの？」

「そういうものなんだよ。自分が選んだ男がくだらない男だとしたら、女の脳が困るんだ。だから脳が必死に言い聞かせてるんだ。西面真人には嘘や誤魔化しはないって。この人は信用できる人だって」

「へえー」僕はただ思いを口に出す。「なんか…わけわかんないや」

「そりゃそうだ」西面君が肯定する。「たぶん誰もわけわかってないよ。俺だってそうだし。それにしても…」

「何？」

「君はどうしてさっきから泣いてるんだ？」

……涙が頬を伝っているのを感じる。僕は泣いている。僕が言葉を返せないでいると、西面君が続ける。

「ま、そんな気はしてたけどね。最初から。君は唐崎を助けたいというよりは、自分の好きな女の体を唐崎に見られているということが耐えられないようだった。それで藁にも縋るような思いで俺に助けを求めたんじゃないか？」

「そうかな…」僕は彼から目を逸らす。見透かされることが怖くて。でも…まるで彼はすべてを見透かしているようだ。

「だって、そうでもないよ…君は自ら動いてどうにかしようとなんかしないだろう。君にもとくに唐崎を助ける義理なんかないだろうし。カーテンになってるかもしれないと思ったって、それ

はきわめて可能性の低い話だったはずだ。でも君は…その仮定を想像して、それを強く恐れた。想像でも君はそれに耐えられなかったんだ」

僕は背中を探るように触る。頭を打ったことばかり気にしてたけど、背中もじんじんと痺れている。そこは大した傷ではないと思ってたけど…皮をすりむいているようだ。手が触れた瞬間に激痛が走って…僕は思わず顔をしかめる。

「好きなら好きっていえばよかったんだ」彼の言葉が僕の胸倉をつかむ。背中でシャツが傷に触れ、僕は身をよじって痛みを耐える。「どうして言わなかった？ それとも自分でも気づいてなかった？」

「わからないよ」僕は痛みを堪えながら話す。「でも…そうかもしれない。ていうか…昔は好きだったんだ。でも僕は彼女の眼中に入っていないことに気付いてからは諦めて…」

「言い聞かせてたんだろうな。そうやって忘れようとしてたんだ。傷つかないように。でもやっぱり…無理があったんだろうな」

「君は…ヤな奴だな？」

「どうして？」

「人が…傷ついているってのに…」

「君までそんなこと言うのか？」呆れながら彼はいう。「君のはただの失恋だろ？ しかもそういうルールを作ったのは君自身じゃないか？ 俺はそのルールを素直に走っただけだぜ？ 俺がゆかりに興味を持っていることにして…そうしてゆかりをその気にさせて。二人の距離を縮めていったのはそもそも君だろ？」

「わかってるよ、そんなことは」僕は言い返す。言い返さずにいられずに。「でも…だって、そんな簡単に…結ばれるとは思わないじゃないか？」

「今まで黙ってたけど…」彼は深刻な面持ちで告げる。「俺は男前なんだ」

「わざわざ自分から言い出すようなことでもないものね、それは」

「そうなのか？」

「そうだよ。そんなことより…僕が三島江のことを好きだって気付いてて…三島江を抱くなんて…酷いよ」

「抱かないわけにはいかなかったんだ」

「そんなことはないだろう？」

「それがあるんだよ。あそこまでその気にさせておいて、こっちが全然その気がないってことになったら…彼女は恥をかかされた、弄ばれたと思って怒り狂う。そういうときの女の怒りといったら、街をまるごと食い破るほどのエネルギーを持つ。俺の命に関わる。抱くしかないよ、そりゃ」

「大袈裟だよ…」

「いや、大袈裟じゃない。君も今日映画で見ただろ？ サトカはタイジに弄ばれたと思い込んで、その怒りでただ近くにいたブ男の麦下に抱かれたんだぜ。仕返しのために。いわばタイジの心をへし折るために」

「あれは映画じゃないか？」

「映画だけど、事実を元にした映画だよ」

「そうなの？ 詳しいね？」

「そりゃね。だってあの映画の脚本を書いているのは玉川四郎だぜ？」

「知らないな」

「俺の本当の父親だよ」

「そうなの？」

「そうだよ」

「あの…芸人であり劇団員でもあるっていう？」

「芸人であり劇団員でもあり脚本も書いているんだよ」

「そうなのか。だったら…言えばいいじゃないか？ 映画を見るときにさ」

「これはわざわざ自分から言い出すようなことなのか？」

「だって…言うだろう？ みんなでその映画見てるんだし…言うだろう？」ふと思いだして僕は問い掛ける。「それで君あの映画を選んだのか？」

「そうだよ」

「正直なんでこれなんだろうとは思ってたんだ。だから…言ってくればよかったのに」

「まだなのか？」

「何が？」

「君の家だよ」

「ああ、そこだよ。白い家。茶色い屋根の…」僕は指差しながら彼に伝える。

「軒先に七夕飾りが出している家か？」彼の視線は僕の示す方向と少しずれている。

「その手前だよ」

「ああ、なるほど」と西面君は頷く。ベカベカと空気が抜け切った自転車を押して、該当の建物の前で止まる。表札を確認する。「ここか？」

「そうだよ」と答えてから僕は自分の自転車を家と塀の間のスペースに押し込むように入れて、そこに停める。それからガレージの脇に掛けてある空気入れを手に取る。

「はい」といって僕はそれを西面君に渡す。

「綺麗な家じゃないか」と彼は僕の家を見上げたまま受け取る。それから自転車の後輪のバルブを探す。

「綺麗に見えるけど…中はそうでもないよ。散らかってたり、汚れてたり」

「どこの家もそういうものかもしれないな」彼は空気入れに体重を乗せるようにして空気を押し込む。タイヤが少しづつ生き返っていく。

「君の家は中も綺麗に片付いてたじゃないか？」

「さっき言っただろ？ そこに住んでいる家族は…なかなかおぞましいよ。だって…わかるだろう？ サトカと麦下が暮らしてるんだぜ？ しかもそこにいる子供は麦下の子供ではなく玉川四郎の息子…つまり俺なんだぜ？」

「どういうこと？」

「帰らなくていいのか？」

「大丈夫。遅くなるっていつてあるから。話してくれよ」僕は西面君の汚点を見たくなくなっている

。それを引き摺り出せる気がして、僕はそうせがむ。

牧田圭介の哀しみ（23時）

「話すといってもね、もうすでにおおまかな話を君は見てるんだよ。あの映画がつまり玉川四郎の実体験だ。役名でいうなら玉川四郎がつまりタイジだ」

僕は口を開けて、後頭部を撫でる。血は出てないようだけど、コブになってるな、と気付く。ゆっくりと頭を整理する。玉川四郎＝タイジ。西面君のお母さん＝サトカ。その旦那が麦下…。西面君は…タイジとサトカの子供。

「つまりだな」僕が混乱しているのを見越したのか西面君が語る。「俺の本当の母親は……ややこしいからこれも役名でいうけど、サトカはタイジを愛してたんだ。面と向かっては話ができなくなるほどに。しかも二人が出会った当時はサトカに彼氏がいた。ま、一人身になるのが嫌だからなんとなく付き合っているっていう恋人だったようだけどね。でもタイジは彼氏のいる女に近づいてはいけなかった。根が真面目なんだ、あの男は。でもある日その彼氏のことで相談を持ち掛けられたから、『別れればいいじゃん』と言ってみたんだ。別れたならタイジはちゃんと責任を取るつもりだった。サトカは当時二十九歳で他人に独身であることをからかわれたりもしていて結婚を焦ってたからね。それでサトカもそもそもタイジのことが好きだったから、当時の彼氏と別れたんだ。だからね、『彼氏と別れちゃった』っていうことをサトカがタイジに伝えさえすれば、後は、タイジが『じゃあ、俺と付き合ってくれ』ってなって…まあ、そのうちに結婚してっていう、そんなただの幸せな話になる可能性もあったんだ。っていうかそうなるべきだったんだ。……返す」

西面君が不意に空気入れを僕に渡す。自転車のタイヤは完全に復活しているようだ。僕は空気入れを適当に片しながら尋ねる。

「でも、実際はそうならなかった？」

「そう。まず麦下だ。麦下は知ってたんだよ。タイジがサトカに彼氏と別れるようにいったことも、サトカがそれを聞いて喜んでくれたことも。麦下もサトカのことが好きだったから嫉妬して、彼はタイジに嫌がらせをするようになった。タイジが注意しても麦下は反省せず嫌がらせを続けたから、タイジは麦下との縁を切った。はっきりと『関わりたくない』と伝えてね。で、麦下はいつも…休憩中も帰りもサトカと一緒にいたから、タイジはサトカに近づけなくなった。麦下がそういう事態をサトカに伝えていけば、サトカはどうにかしようとしただろう。でも麦下はそれを恐れた。伝えればサトカも自分と距離を置くと思ったんだろうね。だから誤魔化した。どうしてタイジがサトカに会いに来なくなったのか、それを訊かれても『さあどうしたんだろ？』ってはぐらかしてしまった。さらには『タイジはフワコのことをよく褒めてたよ』とかね、余計なことをいうわけだ。タイジがフワコを褒めてたのは事実でも、タイジの気持ちはフワコには向いてなかったのに。でも…サトカはただ不安になった」

星が見えないな、と僕は夜空を見上げて思った。分厚い雲が空を覆っている。そういえば、ここ数年天の川を見ていないな、と気付く。誰かと誰かを隔てているのが何なのかも、わからなくなってしまう……そういうこともある。西面君が続ける。

「そこにフワコが追い討ちを掛けた。タイジとフワコは同期でね。タイジは仕方なくサトカや麦下のいないほうの休憩室に行ってたんだけど、そこにはいつもフワコがいた。で、そこで大した

意味もなく一緒に昼食を食べたりして、大した意味もない会話をしてたんだ。でもフワコはそこに厄介な意味を持たした。『あ、この人私のこと気に入っているんだ』ってね。もともとタイジってのはモテる男なんだよ。なんといっても俺の本当の父親だからね。それはそれはモテるんだ」

「いいよ、その話は」イラっときたせいかわ後頭部がズキッと痛んだ。

「まあ、それで…なんだっけ？　そうそう、フワコはサトカと偶然会って話すんだ。最近タイジを見かけないってことをね。つまり元々休憩室でしか会う機会がなかったけど、その休憩室に顔を見せなくなったわけだから。それでフワコにそのことを訊いてみたら、フワコは言ってしまうんだ。『いつも私のところに来ているわよ』ってね。それを聞いてサトカは語る。タイジから彼氏と別れるようにいわれたことについて。もともとサトカは負けず嫌いだったり見栄っ張りだったりするからね。サトカの主張は『タイジはあくまでも私のことを想ってるんだからね』ってことだな。で、フワコは反論する。『タイジは冗談で別れればいいじゃんって言っただけなのに、それを真に受けてあなたが本当に彼氏と別れたから、タイジは引いちゃったのよ』ってね。で、サトカはそこから生じるイメージに、もう耐えられなかった。頭に来てちゃんとタイジに確かめもせずに復讐に転じてしまった。その復讐が麦下と付き合うことだった。なんせ、サトカは麦下が卑怯な真似をしているなんて夢にも想ってなかったからね。麦下はいつも近くにいたし、ちょうどよかったんだ。……聞いているのか？」

「え？　聞いているよ」

「別のことを考えている顔に見えた」

「思い出してたんだよ。映画の内容を」西面君の話に映画のイメージが重なって…しかも頭が痛んで…僕はどこか別の世界にでも流されてしまいそうな感覚に陥っていた。

「まあ、聞いているならいいや」と西面君は続ける。「そんなことで既にサトカはレールを外れてるんだけど…サトカ自身はそんなこと気がつかなかった。自分の母親のことをこういうとなんだけど…思慮深いとはいえない人間なんだ。自分の行為がどういう結果に結びつくとか考えられない。オセロでもやったならそのとき一番多く石をひっくり返せる所に置いてしまうような。そして次第に置くところがなくなって行って追い詰められて、置きたくないところに置くしかなくなってしてしまうような、そんな人だ。で、やがてタイジは気付く。サトカとすれちがったときに、明らかに敵意を見せていることに。不審に想っていたら、これも偶然に聞いてしまうんだ。サトカと麦下が付き合っているって。しかもまもなく麦下はプロポーズする。なんせ麦下にも焦りがあったんだ。バレたらどうしようっていう気持ちからくる焦りだね。つまりバレる前に引き返せないところまで行ってしまおうって腹だな。それでサトカは完全に分別も見境もなくしてたからね、『もういいや、この人で』って感じで結婚を受け入れてしまう。それまでにももちろん何度かタイジはサトカと話をしようとはしてたけどね、サトカはタイジのすべての言葉を跳ね返した。サトカはもう何も考えられない状態だったんだ。言葉が頭に入れば考えることになるからね、本能がそれを避けて、言葉を払いのけるようになってた。それでタイジはある時何にも考えず、考えさせず、黙ってサトカに寄り添って抱きしめた。サトカも本能で受け入れた。もともと二人は愛し合ってたわけだからね。だからそのままタイジがサトカを奪い去ってしまえば、それはそ

れでハッピーエンドもありえたわけだよ。あまり綺麗ではないけど、納まるべきところに納まる
ということだね。でもタイジが気付いたんだ。その手で抱いた女はもう自分が愛した女ではない
ってね。そこにかつて愛した女の残像はあったが、よく見るとただの汚れた女がいただけだった
って。なんせ麦下に抱かれた女だからね、気持ちはわからなくもない。それでタイジはサトカを
奪いもせず、放っておく。サトカはやはり何も考えられず、そのまま麦下と結婚する。でもお腹
には子供ができていた。タイジとのたった一度の性交でできた子供だけど、つまりそれが俺だ」

牧田圭介の哀しみ（24時）

「なんだかよくわからないけど…」僕は感想を伝える。「無茶苦茶な話だね」

「まったくだ。無茶苦茶な話だ。でも『こんな馬鹿な話があるか？』って思うことでも現実
起こったりするんだ」

「でも…」

「何だよ？」

「どうして君はその話を知っているんだ？」

「聞いたんだよ。タイジから。つまり玉川四郎から」

「会ったの？」

「向こうが突然会いに来た。まだ寒かったから…四カ月ほど前だな。人伝に聞いたらしい。『サトカの子供が全然父親に似ていない。かといってサトカにもそれほど似てない。じゃ、誰に似てるかっていうとあんたによく似てる』って言われたそう。そもそも玉川四郎もサトカが自分の子供を身ごもっている可能性を感じていたんだ。だからあんな脚本を書いたわけだからね。それでもしかしたらと思って、わざわざ調べて俺に会いに来た。で、今の話を俺に聞かせた。俺の本当の父親だと名乗った上でね」

「それだとさ」僕は念のために尋ねる。「本当の父親かどうかわからないんじゃないか？」

「それからDNA鑑定をしたんだ。唾液を取ってね。それでわかるらしい。で、一カ月後にその結果が届いた。そうして確定的になった。俺が玉川四郎の息子だってことがね」

「なるほど」僕は言う。「君はそれですっとどこか様子がおかしかったのかな？ 突拍子もないことをいったり、奇行を見せたり」

「いや、それは元々だ。俺は元々頭がおかしい。ただね、平気ではなかったな。何がなんだかわからないが…じゃあ玉川四郎が本当の父親なら、じゃあこの『父親』は誰なんだって思えてね。麦下っていったほうがわかりやすいか。戸籍上の父親であり、経済的にはずっと助けられていたわけだけど、血縁的には無関係なんだ。思えば愛されてもいなかったし。虐待というほどのことは何もされてないけど、物心ついたころからずっと恫喝と否定を繰り返されてきた気がするよ。俺が玉川四郎に似ていることについて、何かあったのかもしれないね。でも俺はどこかで父親というのは、そういうものかもしれないと思いながら…まあ耐えてたんだよ。

でも、だ。こうなってみると俺は何を耐えてたんだろうとも思えだした。血はつながっていないわけだし、しかもこの目の前の男は俺の母親の幸せを潰した男で、俺の本当の父親を陥れた男なんだ。だから俺はさっさと家を出ようと思った。玉川四郎も言ってたからね『もし家を出るなら金銭的な援助はする』ってさ。でも問題は母親なんだ。母親を見捨てるわけにはいかない。なんせ俺のことをすごく大事にしてくれた。俺を心の底から愛してくれた。母親にとっては俺が救いだったんだ。本当に愛した人の子供だからね。でも同時に母親は麦下についても良いように考えてた。そう言い聞かせていたんだ。この人と結婚して良かったんだ、これで幸せなんだって。だからたぶん彼女はまだ何も知らないんだろうね。だって自分の愛した人を陥れて、本当に好きな人と一緒になるっていう夢を潰した人間を、良いようになんか考えられるか？ そんな人間と暮らすことが幸せだなんて思えるか？ ま、彼女は相変わらず何も考えずに生きてきたんだろう

けど。そういうわけで、俺は母親を守りたいんだけど、麦下と別れさせるためには、真実をすべて伝えないといけない。でもそれがひどく難しいわけだ。彼女はだって十何年も…俺が十六歳だから十七年ぐらいかな。ずっとこれで良いんだって自分に言い聞かせてたわけだからね。俺はその十七年もの歳月を否定することになる。…一度尋ねてはみたんだ。『俺の本当の父親は玉川四郎なの？』ってね。その一言だけで、彼女は頭を抱えてワナワナと震えて、その場に跪いたんだ。信じられないぐらい小心者なんだよ、彼女は。『誰から聞いたの？』って涙眼で訊くんだぜ？

とてもじゃないが、すべてなんか語れなかったよ、その時は。伝えれば狂ってしまうんじゃないかって思えるような…あるいは死んでしまうんじゃないかって思えるような…そのぐらい彼女は打ちひしがれていたからね」

「じゃ、どうするの？」と僕は訊く。「そのまま暮らすの？」

「いや、そうはいかない。俺は真実は伝えられるべきだと思う」

「相手が狂ってしまうかもしれないけど？」

「そう。でももちろん、そうならないように気をつける」

「どういうこと？」

「感じてもらうんだよ。その真実を知ることには痛みが伴うだろうが、その先にそれ以上の快感があるっていうことをね。で、快感によって麻痺させて傷みを誤魔化す。そしてその痛みはやがて消えるものだっていうことも知ってもらう。そしてただただ快感を追いかけて、自分から真実を欲するようになってもらう」

「よく…わからないや」

「君にはまだ早い話だよ。俺もさっき気付いたことだ」

「さっき？」

「ゆかりが気付かせてくれた」

「三島江が？」

「まあ、いいよ。そこは君は聞かないほうがいい。君がまた凹むだけだ」

僕は首を傾げながら曖昧に相槌を打つ。ただ言われたとおり、それ以上聞かないようにする。

「それで」と僕は質問を改める。「お父さんのほうは……麦下のほうは大丈夫なの？」

「大丈夫ではないな。母親にどうにか真実を伝えて、離婚してもらおうとして、麦下が納得するかっていうと納得なんかしない。はっきり言ってしまうなら俺がこいつを殺すべきかもしれないとも考えた。誰かがそれをしないとイケないなら、未成年の俺が罪も軽い分適任かなってね。でもね、さっき思い直した」

「さっき？」

「そう、さっき。こいつは自分が何をやっているのかもわかってないんだろうな、ってね。気付いてしまったんだよ。後ろめたさもあることはあるんだろうけど、最終的にモーションを掛けてきたのはサトカのほうだからね。何がどうなってそうなったか、自分の行為がその後どうつながっていったかなんかわかっちゃいないんだ。だからあんなにしれ～と暮らしていられるんだ。そんな…自分が何をしたかわかっていない者に対しては…怒る気も失せたよ」

さっき三島江の家で何があったんだろう？と思ったが…西面君がそこを語らないから僕も聞か

なかった。

「だから」西面君が続ける。「問題は山積みだ。状況が絶望的なことに変わりはない。でもね…俺は今日希望を持てた」

「希望？」

「そうだよ。だって唐崎はカーテンになってたんだぜ？ 人はカーテンにならないっていうのが甘い幻想で、人はカーテンになることもあるっていうのが現実なんだ。世の中には絶対なんかないんだよ。絶望も例外じゃない。絶対の絶望が存在しないということは、そこには希望が残されているということだ」

西面君は力強くそういう。僕は…いまいち釈然としない。希望が残されているなら、それはそもそも絶望じゃないんじゃないか。それに…唐崎は本当にカーテンになってたんだろうか、って疑念も僕の中から消えてない。だってわからないじゃないか？ 唐崎は本当に窓から忍び込んだのかもしれないじゃないか？ 暑さと欲情のあまりおかしくなって全裸で…

「何なら試してみようか？」僕が腑に落ちていないことに気付いたのか、西面君が問い掛ける。

「試す？ 何を？」

「そうだな…」彼は旅行の計画でも練るような顔でどこか楽しそうに語る。「俺が他の女に手を出して、ゆかりと君を結びつけるってのはどうだ？」

「は？」僕は彼の提案をまったく飲み込めない。

「俺が別の女に手を出す。で、ゆかりとはただの遊びだったってことにする。そうすると、ゆかりは弄ばれたと怒り狂って、復讐のために見境なく手ごろな男と付き合う可能性がある。苦しみから出来るだけ早く脱しようとしてね。だから君はその時出来るだけゆかりの近くにいればいい。それだけでゆかりは君を選ぶ可能性が高い。…ビリヤードみたいなもんだな。角度と距離感を間違えなければ、狙ったところにポケットできる。本来なら君がゆかりと付き合うのはまず不可能だ、絶望的にね。でもこの方法を使えばその不可能を可能にすることだってできるかもしれない。さ、どうする？」

「帰ってくれ」僕の声は震えている。ただ…虫唾が走った。

「よし、それでいい」彼は満足そうな顔で頷く。まるで僕の反応も計算づくだったみたいに。「本当に今日は親の仇を討ったような気分だよ。じゃ、君はこれからも…なるなよ。麦下やらカーテンやらに」

彼は不意に自転車にまたがり、そのまま漕ぎ出す。その自転車の後輪は力を漲らせているようで、軽やかにその車両を前へ運ぶ。僕は…呆然とそれを見送る。

仕方なく家に帰る。親はもう寝てるのか、妙に静かだ。僕も音を立てずに階段を上がり自分の部屋へ入る。電気を点ける。夜の暗さを確かめるように、僕は窓際に立つ。外を見ると、隣家の軒先にはまだ七夕飾りが出されたままになっている。夜風にくすぐられて、短冊たちが身を振っている。そこには叶えられるべき願いと、叶えられてはいけない願いがあって…でも神様からしたらそんなことは知ったことじゃないんだろうなあ、なんて思いながら、僕は部屋のカーテンを閉める。

七夕の風にひるがえるカーテン

<http://p.booklog.jp/book/10346>

著者：山城 窓

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/verandah/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/10346>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/10346>